

竹生島・宝巖寺蔵「北斗九星像」について
—特に二人の使者を中心として—
〔大本美月〕



口絵1 「北斗九星像」竹生島宝巖寺（滋賀県長浜市）

〔査読論文〕

竹生島・宝巖寺蔵「北斗九星像」について

―特に二人の使者を中心として―

大本美月

はじめに

竹生島宝巖寺に伝来する「北斗九星像」は擬人化された北斗九星と二人の使者を描いた作品であり、現在は奈良国立博物館に寄託されている。

竹生島は滋賀県、琵琶湖北部にある周囲約二キロの島で、現在は都久夫須麻神社と宝巖寺が並び建つ。元々は水神として浅井姫命を祀る都久夫須麻神社があった。奈良時代に行基（六六八～七四九）が宝巖寺を開いたとされ、承平元年（九三一）の『竹生島縁起』に、天平十年（七三八）に行基が文殊の化身として竹生島へ到ったと記される。平安時代には天台宗の僧が多く島に入り、十世紀中頃に比叡山の末寺として確立した。

本図が宝巖寺に伝来する理由は明らかでないが、中世には比叡山で北斗が信仰されていたため、その末寺であった宝巖寺にも、北斗を描いた作品として伝わったと推察されている。

単体で取り上げた先行研究はなく、井手誠之輔氏は中国仏画の一つと見做し、以下のように位置付ける。

本図は現存する最も古い北斗九星を描いた作品で、北斗九星の典故は、星名が一致すること、注釈巻に本図と類似する北斗九星の擬人像が描かれていることから道教経典の『太上玄靈北斗本命延生真經』であるとする一方で「陀羅尼使者」と「擎羊使者」、二人の出典は確認できないことにも言及する。星宿信仰は宮廷を中心に行われ、本図も南宋の宮廷画風を伝える。尊格が雲に乗って降臨する図様は、中国の儀式である「水陸会」に使用された水陸画の特徴である。また中国朔州市にある宝寧寺の水陸画には本図の北斗九星に類似する作例が存在することから、本図も水陸画の一つとされる。

宝巖寺本は「水陸画」の一部をなしていたとみられ、その尊名や図像は道教経典の『太上玄靈北斗本命延生真經』を典拠とするとされるが、ではなぜ北斗七星が女性の姿で描かれるのか、さらに「陀羅尼使者」、「擎羊使者」の二人に関する素性と役割については、いまだ明らかになっていない。また、本図のみを扱う先行研究がないことから、その信仰についても言及されることがなかった。そのため本稿では特にこの三点について考察を加える。

一章では北斗信仰の概要、二章では北斗と水陸会の関係を確認す

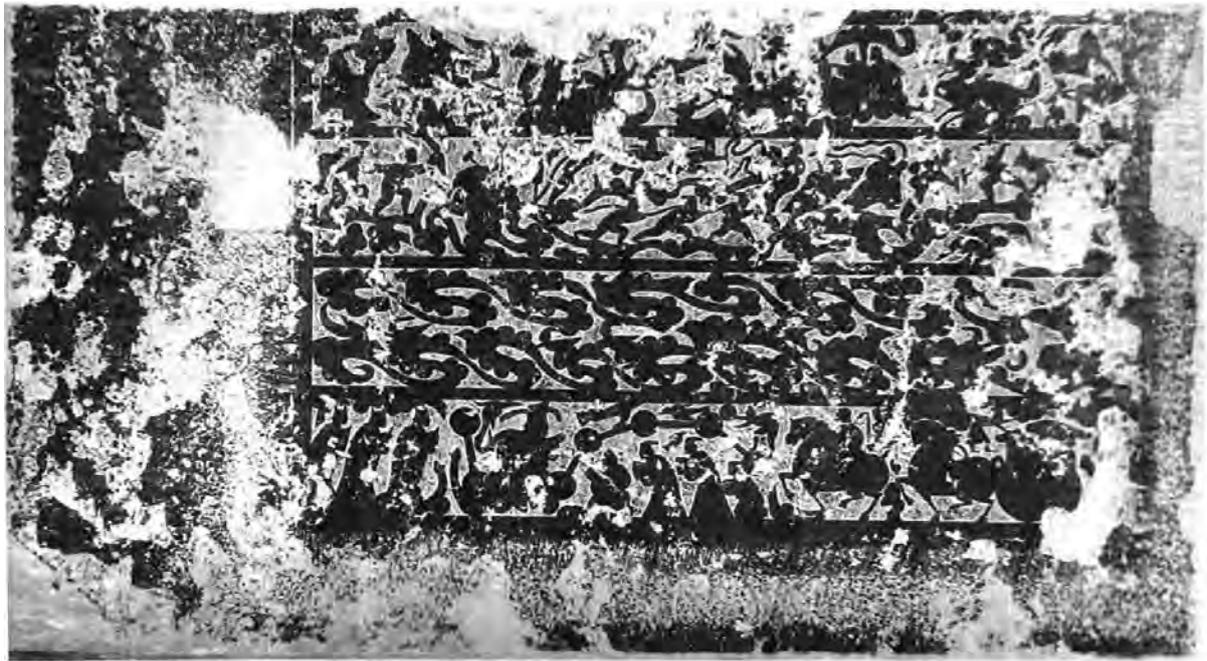


図1 北斗に乗る人物の画像石（「武氏祠画像石」山東省嘉祥県武宅山）



図2 図1下段左部分（描き起こし図）

る。続く三章では本図の描写内容に触れ、四章において北斗九星の信仰、五章で北斗九星を先導する二使者の典拠についてそれぞれ考察していく。

一 北斗信仰について

星の中でも北斗は、北極星と共に多くの信仰を集めてきた。漢時代に占いに使用された式盤には中央に北斗七星が描かれ、北斗が回転することで他の天体を動かし、宇宙の秩序を生み出すという当時の世界観が表現されている。^②

『史記』は前漢の武帝（在位、前一四一〜前八七）の時代に司馬遷（前一四五〜前八七）が書いた歴史書で、正史の第一とされる。その「天官書」では、天上にも天帝を中心とした官職があると考えられたことが窺える。北斗七星は璇璣玉衡とも呼ばれ、「七政」の調整を司るとされる。「七政」とは、日月と木、火、土、金、水の五行を指す。北斗は天帝が乗る車とされ、天帝の周囲を回り、物事の均衡を整えて天帝を補助する。

二世紀後半、後漢のものと思われる画像石にも北斗の図像がある（図1・2）。山東省嘉祥県武宅山の武氏祠画像石には、北斗に乗る人物が描かれ、『史記』の記述から天帝と考えられる。林巴奈夫氏は北斗七星の前に跪く人物がざんばら髪であることに注目し、彼らは死者の霊、北斗に乗って向かい合う人物は天帝の中でも刑罰を司る「太一」の可能性が高いとし、北斗七星が司命の性格を持つ前身であると述べる。^③ 第六

星の右上には輔星を添える人物が描かれる。

四四八年成立の『宋書』『天文志』も、北斗は天帝の乗車として空を巡り、物事の調和を整えることから「七政」の枢機で陰陽の源とする。北斗七星の各星の名は、第一星から順に天枢、璇、機、權、玉衡、開陽、搖光と記す。

北斗に関する説話には「子供の寿命」の話がある。最も古いものは四世紀中頃に書かれた『搜神記』に見られ、若くして亡くなるとされた子供の寿命を南斗と北斗が延ばす、という内容である。説話中に「南斗は生を司り北斗は死を司る」との説明があり、北斗の陰に属し死を司る性質が認められる。

以上のように主に史書に見る記述は、皇帝や臣下、国家のことに關する内容が多い。北斗は天帝の乗車、陰に属する、司命神などの性格を持ち、同様の内容は説話にもあらわれていた。

次に北斗信仰と道教に注目したい。本図で描かれる、北斗七星に輔星と弼星の二星を加えた「北斗九星」は、道教において特に重視された。「九」は陽の数である奇数の最大数であり、易の陽爻の象徴、「久」と音通などの理由から、縁起の良い数字と考えられたことが一因として推測できる。北斗九星で加わる輔弼星は北斗を助ける存在である。「輔」は、車に重い荷物を乗せる際に用いる、車軸の上に添える木のことを指し、そこから「助ける」や「補佐」の意味に転ずる。「弼」も同様に助ける意味を持ち、名前にも役割が表れている。

唐代に道教は国家宗教となった⁷。国家の後ろ盾を得た道教の発展に伴い、北斗については本図にも見られる貪狼から破軍までの星名と、属星の信仰がみられるようになる。

属星の信仰とは『北斗七星延命経』に依り、個人の禍福は自分が属

する北斗七星の星によって決まると考えるものである。干支を北斗七星の各星に割り当て、その人の干支に対応する星が属星となり、一生の守護神として属星祭や本命祭と呼ばれる祭祀において祀る。具体的には、子年は貪狼星、丑年と亥年は巨門星、寅年と戌年は禄存星、卯年と酉年は文曲星、辰年と申年は廉貞星、巳年と未年は武曲星、午年は破軍星に属する⁸。なお天皇の属星は北斗七星ではなく、北極星となる。この思想は中国から日本へと伝来し、『貞信公記』や『台記』など平安時代の日記には属星祭を行い、延命を祈ったことが記される⁹。現代においても日本の密教寺院で星祭りとして多く行われ、冬至か節分の時期に主に除災招福を目的として開催される。星祭りでは羅喉星、土曜星、水曜星、金曜星、火曜星、計都星、月曜星、木曜星の九曜星の中から選ばれる、その年の運命を司る星を当年星として合わせ祀る場合も多い。星祭りは本図の伝来した竹生島宝厳寺でも毎年二月二日から四日に行われている。

唐朝の滅亡後、中央集権体制が崩れ、権力分散の時代を経て再び政治権力の集中を目指した宋代には、同様に分散してしまった道教の教団も再編成し、統一的支配へと戻った。輔弼星が信仰を集めるようになり、北斗九星としても注目されることとなる。例として、『宋大詔令集』の記述がしばしば取り上げられる。北宋時代、徽宗（在位、一一〇〇～一一二五）の宣和元年（一一一九）五月二七日の「寫九星二十八宿朝冠服頒行天下詔」の詔がそれである¹⁰。北斗九星と二十八宿の服制が定められ、井手誠之輔氏はこの記述をふまえ、「南宋で描かれる星宿の形姿は、厳格な統制が求められていたらしい。宝厳寺本の擬人化された整然とした図像は、そうした南宋における宮廷周辺と結びつきがあるかもしれない。」と述べる¹¹。宋代は道教に関心

のある皇帝が少なくなかったが、徽宗皇帝もその一人であり、あまりの傾倒に国政を弱体化させ、都の開封を含めた華北の地を金に奪われる結果に導いたとも言われる。¹²⁾

さらに道教は中国から韓国へと広まる。韓国の寺院では七星閣が設けられ、神格化した北斗七星を祀り、延命長寿を祈る。十五世紀後半の朝鮮の記録には、道教の祭祀を管轄する建物内に、被髪女性の姿をした北斗七星が祀られていたと記される。¹³⁾

また、北斗九星信仰の広がり伝える例に、東南アジアの九皇信仰がある。九皇神と北斗九星について原田正己氏によると、九皇神および北斗九皇は北斗九星を神格化したもので延命を願う対象であり、マレーシアでは斗母宮と呼ばれる廟に九皇神を祀り、九月一日から九日まで九皇神を迎える祭りが行われるという。¹⁴⁾『正統道蔵』や『雲笈七籤』には「北斗九星」を「北斗九皇」と表記した例も見られ、宋代には九皇の呼び方が存在していたとする。¹⁵⁾北斗九星信仰が東南アジアにまで広まり、現代においてもなお、信仰されていることが分かる。

道教における北斗信仰は、司命神としての側面に注目した傾向が見られる。さらに日本ではあまり聞き慣れない北斗九星に対する信仰は、中国から韓国や東南アジアに伝播し、広がりを見せたことが知られる。

二 北斗信仰と水陸会

「水陸会」は堂内に尊格を招請して施食や懺悔を行い、その功德を受けることで、靈魂の成仏や先祖の追善供養を行う施餓鬼会の一環で、本図制作の背景とみられる重要な儀式である。仏教、儒教、道教

の尊格を描いた絵を堂内に掛けることから、三教融合という特徴がある。宋代に発達したが、始まった時期は明らかではない。ただ、この始まりについて知られる説話が、熙寧四年（一〇七二）に楊鏐が記した「水陸大齋靈跡記」に認められる。¹⁶⁾

梁の武帝が夢のなかにおいて、ある高僧から「水陸会を設けるべきである」と告げられる。大臣や沙門らに問うたところ、「水陸会」を知るものはいなかったが、宝誌和尚のみが「広く経教を尋ねれば必ず因縁がある」と言った。そこで大蔵経の披覽を重ねたところ、釈迦十大弟子のひとりである阿難が焦面鬼王に会い、「平等の斛食」をすることと分かったため、儀文を製作した。天監四年（五〇五）二月十五日の夜、帝は鎮江の金山寺で、宝誌和尚の助言に基づき「水陸会」を興した。その後、本儀文は陳・隋の両朝には伝わらなかったため、唐の咸亨中（六七〇〜六七三）に再興されることとなった。

実はこの説話中に登場する阿難と焦面鬼王の部分は、他の説話の引用であることが知られている。¹⁷⁾

ある夜、阿難は焦面鬼王（焰口餓鬼）から三日後に命を失うと告げられる。そこでその難を免れる方法を問うたところ、摩揭陀国の斛を用いて餓鬼と婆羅門仙たちに一斛の飲食を施し、焦面鬼王（焰口餓鬼）のために三宝を供養することと告げられる。阿難は釈迦の元へ至り、事の次第を話して陀羅尼を授けられた。その陀羅尼を誦して得た斛で施食を行った結果、焦面鬼王は苦しみから逃れ、阿難の寿命が延びた。

以上は実叉難陀(六五二〜七一〇)訳『仏説救面然餓鬼陀羅尼神呪經』、不空(七〇五〜七七四)訳『仏説救拔焰口餓鬼陀羅尼經』を典拠とする⁽¹⁸⁾。この両經が梁の武帝の時代よりも後に訳出されていることから、「水陸会」の創始説話は後世に作られたものと、牧田諦亮氏が指摘する⁽¹⁹⁾。

一方、「水陸会」の実際の開始時期について千葉照観氏は、袁杓(一二六六〜一三二七)撰の『延祐四明志』において咸通二年(八六一)に水陸道場のあることを示す記述に基づき、その起源は咸通二年まで遡るとする⁽²⁰⁾。「水陸会」が阿難と焦面鬼王の説話に倣った儀式と位置づけられることから、靈魂救済などを主な目的とし、行う者にとって「延命」を得る要素があることも認められる。

宋代には、孝宗朝で宰相を務めた史浩(一一〇六〜一一九四)が「水陸会」を寧波へ伝えた。史氏は東錢湖周辺に拠点を持つ一族で、南宋で三代にわたり宰相を輩出した。史浩は一族の中で始めに宰相となり、鎮江の金山寺で「水陸会」を見たことを契機に武帝が行った「水陸会」の再現を決意する。乾道九年(一一七三)、東錢湖の北西畔に水陸道場として月波寺を創建し、金山寺を手本に「水陸会」を行った。史浩は自ら儀文四巻を撰述し、孝宗から「四時水陸無礙道場」の宸翰を賜ったという。

それから約百年後の咸淳五年(一二六九)、志磐(生没年不詳)が月波寺で中国天台宗の歴史書である『仏祖統紀』を書き上げ、さらに全六巻の「水陸会」の儀文を著した。志磐の儀文『法界聖凡水陸勝会修斎儀軌』は明時代に株宏(一五三五〜一六一五)の修正が加えられ、現在に伝わる。史浩の儀文の系統が「北水陸」、志磐の儀文の系統が

「南水陸」に繋がり、現在中国で行われる「水陸会」は志磐の系統に則る。

志磐の『法界聖凡水陸勝会儀軌』では下堂に招く様々な尊格のうち、始めに招請される一群の諸天の中に「北斗七元星君」の記述がある⁽²¹⁾。北斗が招請の対象となっている点からも、本図が「水陸会」で用いられた可能性をみる必要がある。

千葉氏は施食の中でも「水陸会」とは、先程の焰口餓鬼についての經典『仏説救面然餓鬼陀羅尼神呪經』と『仏説救拔焰口餓鬼陀羅尼經』に基づき、餓鬼や諸仙に食物を供養し、飢えの苦しみを取り除くことによつて、自身は長寿や福を得るものとする⁽²²⁾。さらに、宋代における「水陸会」の功德については、熙寧四年(一〇七一)の『水陸大齋靈跡記』より、六道四生の苦を救うためには「水陸会」が最も殊勝であり、地獄にある者を救って天に生まれさせることができる⁽²³⁾。

以上のように、宋代には「水陸会」を行うことで地獄から逃れることができ、「水陸会」に招請される尊格には、福を与えることや寿命を延ばすことが期待されたとわかる。多様な尊格が招請されるため、それぞれに役割がある可能性も考えなければならないが、前提となる共通の土台として、まずは以上のような認識を踏まえる必要がある。

ここまで本図が「水陸会」で用いられる像との前提で見てきたが、一方で星宿を描いた作品とする説もある。高志緑氏は「水陸画ではなく単独で星宿を本尊とする法会に用いられた可能性がある。水陸会に含めるべきか否か難しい」と述べる⁽²⁴⁾。それでも本図を水陸画とみなして考察を進めるのは、後述する宝寧寺水陸画の中に類似する作品が見出されているため、雲を伴い降臨する構図が水陸画の特徴と共通するため、また本図の法量が他の水陸画と近似し⁽²⁵⁾、規模の近い儀式で用い



图3 「北斗九星像」竹生島宝巖寺（滋賀県長浜市）

られた可能性が考えられるためである。続く三章以降でも、本図を「水陸会」使用像の可能性を認めつつ考察を加えていく。

三 「北斗九星像」における描写の分析

本図は擬人化した北斗九星と二人の使者が雲に乗り、降臨する姿を描く(口絵1・図3)。

一幅、絹本着色、縦一一・五センチメートル、横五四・一センチメートル、十二世紀後半の南宋時代に制作されたとみられる。谷口耕生氏は「洗練された画風は制作が南宋時代であることを示しており、志磐の時代にさかのぼる水陸画として貴重な作例である」とし、齋藤龍一氏は「面貌や着衣の表現などが細密に描かれるとともに、落着きのある鮮やかな彩色が施された、優れた絵画作品である」と言及し、その表現を高く評価する。

雲に乗った十一人の人物で構成し、画面の上三分の二に北斗九星、下三分の一に二人の使者を配置する。全体的に肥瘦が少なく、ほとんどを均質な細い線で描き、女性像の肌の輪郭には赤線、その他男性像や衣服の輪郭には黒線を使用する。

まず北斗九星に注目する。四列に整理し、一列目向かって左から順に、七星の第一星、第二星、第三星、二列目右から第四星、第五星、第六星、三列目に第七星と輔星、四列目に弼星が並ぶ。

七星は髪を結ばずに流した、被髪姿の女性形に描く。髪の毛先は一本一本細かく分かれ、動きの様子が表現される。白い衣に鱗袖の襜褕を着ており、胸元から肩にかかる金色の装飾を着ける。装飾は渦巻きをデザインした曲線的な物で、肩の部分は先に向かって細くなる。

肩部分の形は第一、六星に見るハート型にくり抜いたような形と、二つの渦巻きを向かい合わせた形の二種類に分類できる。それぞれの星名が記された笏を両手で持ち、一列目左の「貪狼」、一列目中央の「巨門」、二列目右の「文曲」の三つが確認される(図4)。衣の裾から覗く赤い履はつま先の形を描き分ける。第一星の丸みのある雲形のもの、第二、六星の矢印のような形のもの、第三、五星の二つの山になっている形のもの、第四星のY型のものがある。

七星の姿勢は異なる方向に向く。第一、五星は向かって左斜め下の進行方向、第二星は振り返り向かって右方向を見る。第三星は正面を向き、第六星は正面から少し左の方向、第四、七星は左の方向を見る。

輔星、弼星の二星はひげのある男性の姿で表し、黒の冠帽、宋代の官服に似た赤い衣を身に着ける(図5)。襟と袖は一部黒地になっており、黄で模様を描く。首元に方心曲領を着け、赤い衣の裾部分に黄色で柄をあしらう。笏は北斗七星に比べて長く、白色のものを持つ。三列目の輔星の笏には「左輔」、四列目の弼星には「右弼」の文字が確認できる。北斗九星に見るのと似た形式の服装は、星宿神を描いた他の作品にも認められる。このことについては、後に改めて類似する図像を確認する。画絹が脱落するため、輔星の視線は判別できないが、弼星は左斜め下を見る。

九星を先導する二人の使者は女性の姿であり、左は「陀羅尼使者」、右は「擎羊使者」と金泥で記される(図6)。襟元に黄色で模様を描かれた黒い着物に、黄色の柄の入った赤地の裙と白の裙を重ねる。茶色の天衣を肩にかけ、赤い履を履く。陀羅尼使者の履は矢印型のみ、先、擎羊使者はY型である。頭には鳳凰装飾のついた冠を被り、手首に腕輪を着ける。右手に持つ剣は両刃の直刀で、柄の先端と細長い環



图4 「北斗九星像」 七星



图6 同 二使者



图5 同 輔星·弼星

の先に裝飾がつく。左手には陀羅尼使者が花のついた桃の枝、撃羊使者が盆をそれぞれに持つ。

次に背景と雲の表現に着目する。背景には何も描かないことから、空中を飛んで降臨する様子を表現し、画面右上から左下方向へ進む雲は、所々を渦巻き状に表現し、輪郭を三重に隈取る。雲や背景は下から上へかけてより暗くなるよう、影のように濃色を塗る。三星の足元にみる雲気文から判断すると、二使者が乗る雲の上に、九星の雲を重ねるように描いているとわかる。雲のたなびき方は、九星の雲が画面上端まで広がり横方向へたなびく部分を太く描くのに対し、二使者の雲は横にたなびく部分を細長く表現している。これにより二使者の雲は九星よりも速く、先んじて進んでいるとわかる。

尊格が降臨する描写は「水陸画」の大きな特徴である。井手誠之輔氏は画中の尊格の描き方について、時代が下るにつれ尊格が「浄土にある状態」、「浄土から降臨する状態」、そして「人間の世界にいる状態」と、順に変化する傾向があると述べる。宋時代の仏画には「浄土にある状態」や「浄土から降臨する状態」がみられるが、元時代に入ると「人間の世界にいる状態」に変わり、「水陸画」はその中間の降臨する諸尊の表現に当たるとする。⁽²⁸⁾「水陸画」の雲については、要点を絞り込む効果や状況描写の省略、礼拝されるべき対象として飛来してくる姿を描く意図があったと、鷹巢純氏が言及している。⁽²⁹⁾

細い線で描きこまれた本図は、尊格が雲に乗って降臨する場面を描き、北斗七星と二使者は女性形、輔弼星は男性の姿であらわす。また、雲を北斗と二使者が乗る部分で描き分けていることを指摘しておく。

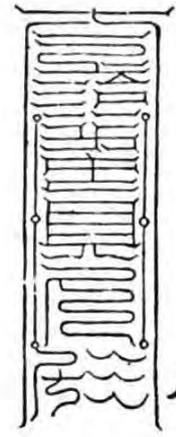
四 北斗九星について

北斗七星の持つ筭に認められる星名は、明国正統九年（一四四四）の『正統道蔵』所収、『太上玄靈北斗本命延生真經』⁽³⁰⁾と一致すると知られている。なお道教において星宿が神格化された場合には、「星君」と「君」をつけて呼ぶことが通例となっている。⁽³¹⁾ 經典にみる星名は以下のとおりである。

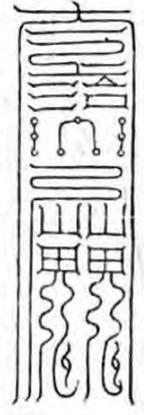
- 北斗第一 陽明貪狼太星君
- 北斗第二 陰精巨門元星君
- 北斗第三 真人祿存真星君
- 北斗第四 玄冥文曲紐星君
- 北斗第五 丹元廉貞綱星君
- 北斗第六 北極武曲紀星君
- 北斗第七 天闕破軍閼星君
- 北斗第八 洞明外輔星君
- 北斗第九 隱光內弼星君

『太上玄靈北斗本命延生真經』は北宋時代、天禧三年（一〇一九）に製作された道教經典の『雲笈七籤』に引用されることから、宋代まで存在した逸書とみられている。『正統道蔵』に収める『太上玄靈北斗本命延生真經註解』には、本図に類似する被髪的女性形の七星と男性形の輔弼二星の絵が認められる（図7）⁽³²⁾。『佛説北斗七星延命經』には本図と類似する北斗七星が見出され（図8）、被髪的女性で筭を持

北斗第一陽明貪狼太星君 子生人屬之



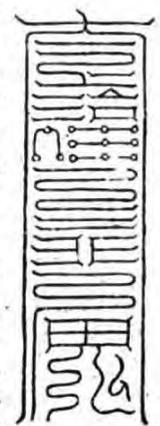
北斗第二陰精巨門元星君 丑寅生人屬之



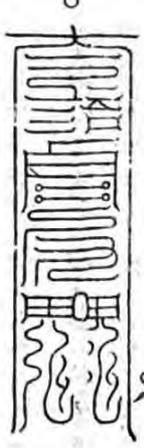
北斗第三真人祿存真星君 寅戌生人屬之



北斗第四玄冥文曲紐星君 卯酉生人屬之



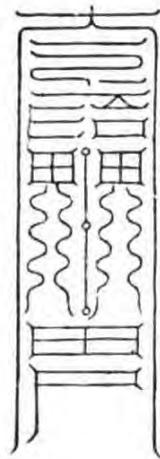
北斗第五丹元廉貞綱星君 辰申生人屬之



北斗第六北極武曲紀星君 巳未生人屬之



北斗第七天衝破軍闡星君 午生人屬之



北斗第八洞明外輔星君



北斗第九隱光內弼星君



頌曰
 誰知九竅表天罡 運轉靈臺變化機
 忘意見生應降福 輕心落死自成非
 默施丹闢通神德 高布玄山炳聖威

圖7 「太上玄靈北斗本命延生真經註解」挿絵

ち、さらに幼い子供姿の輔星を描くものの、彌星の姿は見えない³³⁾。

『雲笈七籤』には九星に関する記述が複数見られ、「北斗九星七見二隠、其第八、第九是帝皇太尊精神也」とし、輔弼二星を隠星と記し、特に二星が信仰されていたことを示す³⁴⁾。同書中には、同様に二星とも隠星とするものと、輔星は明るい星、彌星は隠星とする二者の記述が認められる。実際に輔星は空に見ることのできる星であるが、一方の彌星は想像上の星である。さらに「得見第八、第九、延寿無窮」との記述があり、輔弼二星を見ることができれば寿命が伸びるとする。北斗九星信仰は十世紀頃の唐末五代に、中国南部を中心に始まり、宋代には北斗七星以上に信仰を集めたとされる³⁵⁾。

また、本図と類似する作品が、中国朔州市右玉県の宝寧寺にあることを井手誠之輔氏が指摘する(図9)。宝寧寺には「水陸画」が一三九幅残っており、その中の一つに九星が描かれる。

絹本着色、縦一一六・五センチメートル、横六一・〇センチメートルで本図より少し大きい掛幅だが、二人の使者はみえない。七星は前から二人、三人、二人の三列に並び、少し空間を開けて輔弼二星を描く。七星は被髪的人物としてあらわすが、解説では男性とされる³⁶⁾。着物は茶色地で花や鳳凰、星座などの柄を描き、襟と袖に青い線が入る。赤い裙の下には、色や柄が異なる裙を重ねる。赤い履を履き、肩に朱色の裏地をつける緑色の天衣をかける。履のつま先は二人のみ確認でき、どちらも同じ形とする。手に笏を持つものの星名は書かれない。視線は前列右の人物が向かって左側を向き、ほか六人は同じ方向を向く。

輔弼星の二人は青い冠と赤い着物を身につけ、手に笏を持ち、七星の後ろを進む。宝寧寺本では雲に輪郭線は無く、霞が漂うようにぼん

やりと表現する。本稿で扱う宝嚴寺本では全員を足元まで描くのに対し、七星の三人以外は足を隠している。画面右上に「北斗七元左輔右彌衆左第三十五」と記す。

この宝寧寺本は、北斗の容姿や整列する構図が宝嚴寺本と類似する。他の「水陸画」では降臨するモチーフは共通していても、整列した描写をする例は多くない。宝寧寺の「水陸画」と宝嚴寺本にみる北斗九星像は特に近い作例と言え、宝嚴寺本が「水陸画」であることの裏付けとなる。

次に京都府松尾寺蔵「終南山曼荼羅」(図10)にみる七星に言及したい。本図は日本の鎌倉時代の作とみられ、七星を被髪的女性形として描く例の一つである。北斗曼荼羅の一種だが、一般的な北斗曼荼羅とは異なり、尊格が整然とは並ばず、「終南山遇斗」の説話、つまり皇帝が終南山で七星の一人と会う内容をあらわす³⁷⁾。

この説話には、

皇帝遇北斗七星図並所屬星、出大唐開成四年曆中、皇帝遊於終南山、忽見一女、披髮身着素衣、山中遊行、皇帝問曰、是何女人乎、答曰、吾姊妹七人是北斗七星管

とあり、七星が女性で、その中の一人が皇帝の前に姿を見せるなど、「終南山曼荼羅」の表現とも一致をみる(図11)。画中には道教と仏教の要素が混在し、道仏習合の特徴が認められる³⁸⁾。「終南山曼荼羅」は道教神の七星が被髪的女性として描かれた例の一つとわかる。

また、道教の九星を描く作例として、高麗美術館蔵「熾盛光如来降臨図」がある(図12)。麻布着色、一幅、縦八十四・八センチメートル、

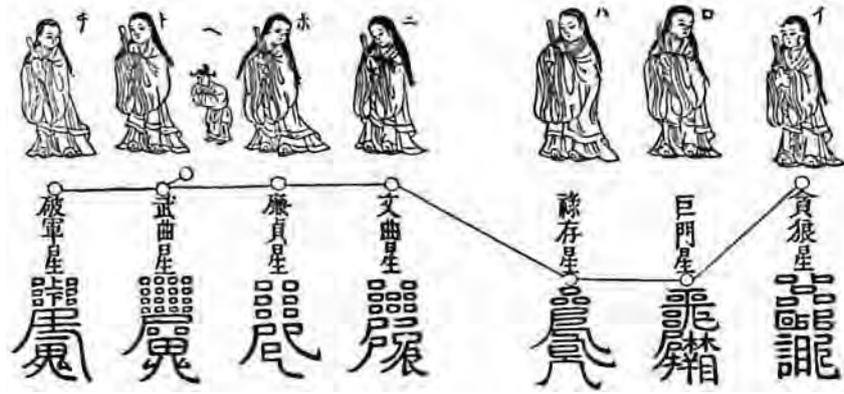


图8 「仏説北斗七星延命經」挿絵



图9 北斗九星 (宝寧寺水陸画)

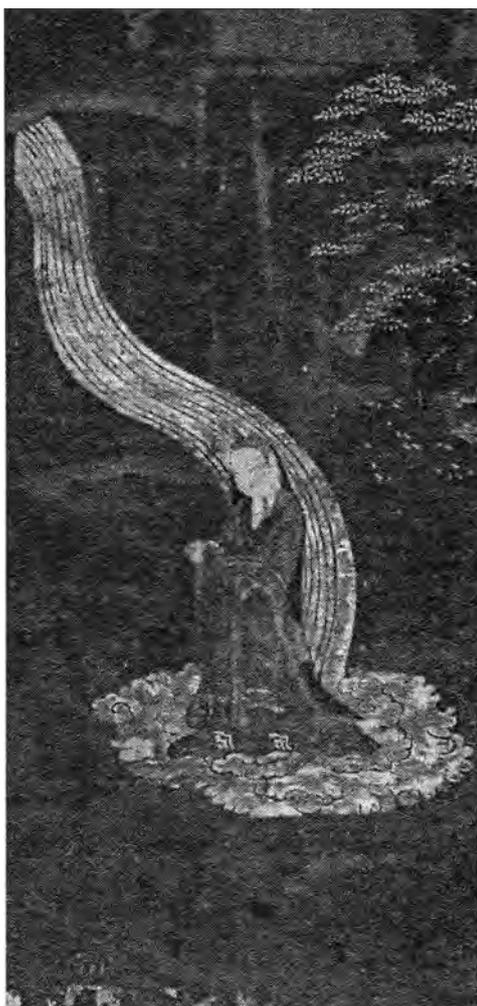


图11 同 部分



图10 「終南山曼荼羅」
松尾寺（京都府京都市）

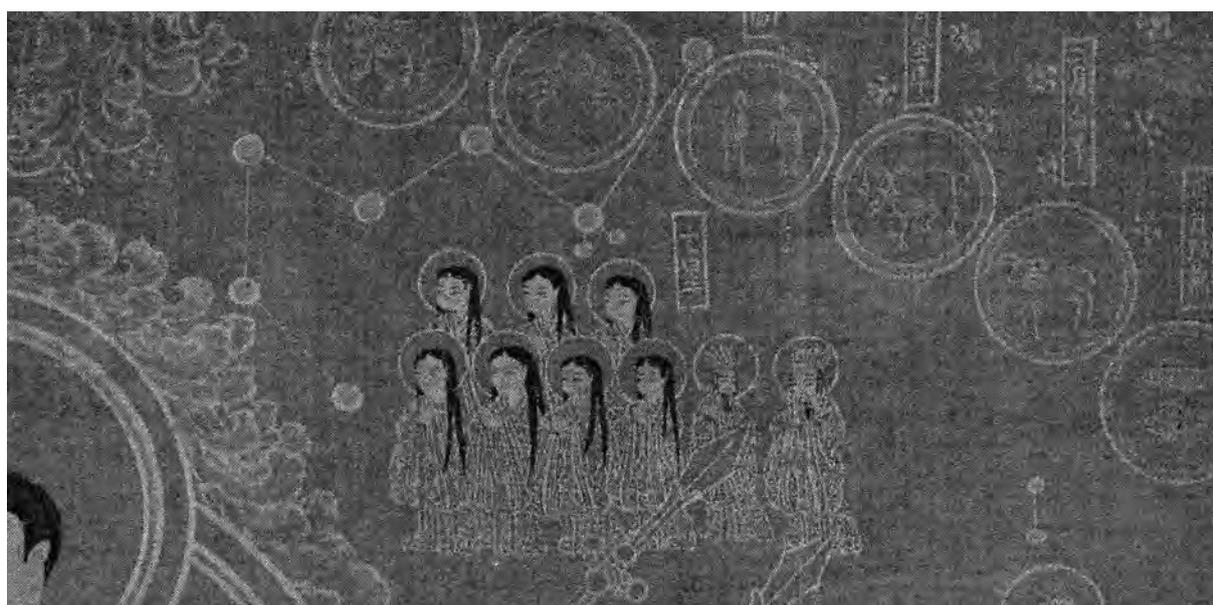


图12 「熾盛光如来降臨図」 部分 高麗美術館

横六十六・一センチメートル、東寺観智院に伝来し、下端中央に明国隆慶三年（一五六九）の銘が残る。明の年号は朝鮮王朝でも用いられており、朱で塗られた麻布に金泥線描画という朝鮮前期に見られる特徴を有することから、朝鮮半島での制作とみられている⁽³⁹⁾。北極星を神格化した熾盛光如来が、牛の引く宝車に乗って降臨する様子を描く。中央にみる熾盛光如来の右上に九星があり、宝蔵寺本の九星と類似する服装に、笏を持つ姿であらわす。七星を被髪姿の女性、輔弼二星を男性とする点が共通する。金泥の文字は「七星」と記されるが、輔弼二星の姿を描き込むのは、二星を加える信仰の反映を示す。

ここまで道教の作品や、道仏の信仰の混ざった作例において、北斗が女性の姿をとる例が見られた。このような女性の姿に関して柳澤孝氏は、日本の北斗曼荼羅では男性であらわすのが普通だが、中国では道仏ともに女性であらわす場合があり、由来は明らかではないが図像学上注意すべきであると述べる⁽⁴⁰⁾。

北斗を女性の姿であらわすこと理由として、陰陽思想が関係するとみられる。道教神で「陰」に属するものを司る神は、同じく「陰」に属する女性の姿をとる例がある。例えば大地の神「后土」がある⁽⁴¹⁾。大地は命の源となる食物を作り、動植物を育てるために重要視され、また墓の守り神としてもよく祀られた。やがて天は「陽」、地は「陰」のイメージ、男性が「陽」、女性が「陰」のイメージと結びつき、「后土」を女性の姿で表現することが増えた。また九曜の日月は、男性と女性に描かれることがある。武田和昭氏は中国と朝鮮半島の熾盛光仏降臨図を観察し、その中に描かれる九曜星の日曜星は男性、月曜星は女性に描くと述べる⁽⁴²⁾。

このように「陰」に属す場合に女性の姿をとる例がある。「緯書」

では北斗が「陰」に属すると書かれるため、「子供の寿命」の説話でも北斗が「死」、南斗が「生」を司り、それぞれに「陰」と「陽」のイメージが与えられていた。以上の検討から、北斗は「陰」に属するために女性の姿があてられた可能性をみておきたい。

五 二人の使者について

最後に北斗九星を先導する二人の使者に注目したい。

文化庁国指定文化財等データベースの作品解説では、本図の「撃羊使者」が静岡県MOA美術館、京都府醍醐寺に所蔵される九曜星図像の「月孛星」と類似し（図13・14）、左手に持つ盆には「羊頭」を載せているとする⁽⁴³⁾。この九曜星図像は熾盛光仏、金曜、水曜、木曜、月孛星、土曜、火曜、計都星、羅睺星を白描図像で描き、MOA美術館本が平安時代の長寛二年（一一六四）、醍醐寺本が鎌倉時代十三世紀の作である。「月孛星」は七政の運行に関わるとされ⁽⁴⁴⁾、ここでは女性の姿をとる。本図の「撃羊使者」と比較すると、髪を流している点や着衣のデザインが異なるなどの相違点はあるが、右手に剣、左手に盆を持つ点が共通する（図15）。さらに「月孛星」の盆には「羊頭」を描く。

本図では絹の脱落により「撃羊使者」の持つ盆に何が乗せられているか判別し難いが、やはり「羊頭」であると推察される。「撃羊使者」の「撃」には捧げるという意味があり、名称的にも相応しい。

二使者はともに右手に剣を執ることから、調伏する対象があることを示し、邪を払う意味合いが想定される。

これまで「陀羅尼使者」と「撃羊使者」は典拠不明とされてきたが、



图15 「北斗九星図」二使者



图13 「九曜星図像」月孛星
醍醐寺
(京都府京都市)



图14 「九曜星図像」月孛星
MOA美術館
(静岡県熱海市)

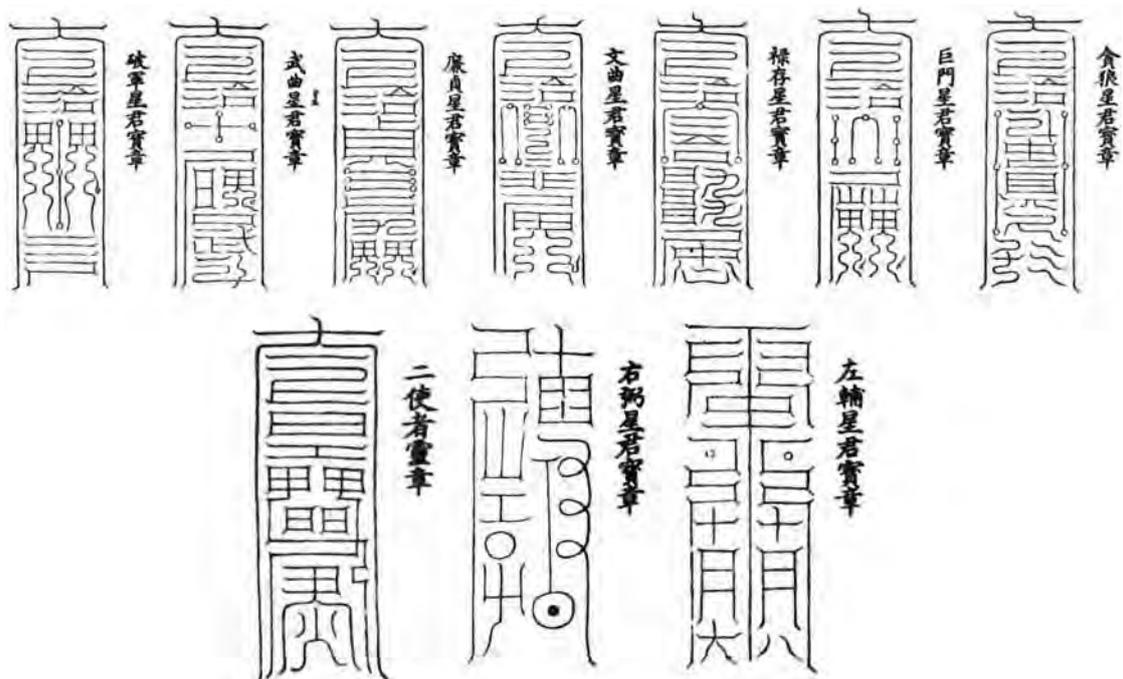


图16 「太上玄靈北斗本命延生真經註」挿絵

筆者が注目したのは『太上玄靈北斗本命延生真經註』にみる、北斗の降臨の際の記述である。⁽⁴⁵⁾

吾若見斗中一人如玉女托羊頭者、名曰擊羊使者、次見一人左手執劍右手托華盤者、名曰陀羅使者、此二人先來檢校所有供養不精專及穢觸、皆此二人奏報、若有異香紫雲入室者、是吾七真及左輔右弼下降也、

もし斗中に一人玉の如き女、羊頭を托する者を見れば、名づけて擊羊使者と曰う。次に一人左手に劍を執り、右手に華盤を托する者を見れば、名づけて陀羅使者と曰う。この二人は先に来り、供養あるところに先來檢校し、精專ならず穢觸に及ばば、皆この二人奏報す。もし異香紫雲室に入る者あればこれ吾が七真および左輔右弼の下降するなり。

とあり、手のひらに羊頭を乗せる女性が「擊羊使者」、もう一人の左手に劍を持ち右手に華盤を持つ女性が「陀羅使者」としている。⁽⁴⁶⁾

二人の使者は北斗九星よりも先に供養の席に訪れ、人が怠けたり穢れに触れたりしていないか調べ、北斗に報告する。もし素晴らしい香りがしたのなら北斗七星と輔弼星が降臨する、との内容になっている。

「異香」は仏教にも道教にも使用される単語で、聖者が臨終する場面、仏舍利に関する不思議な話の場面、仏菩薩などが現れる場面などにおいて登場する。船山徹氏は「異香」の語が認められる場面について、「聖なる存在との接触ないし遭遇、あるいはそれによって聖なる

空間が現前化すること」が共通すると指摘する。⁽⁴⁷⁾

『太上玄靈北斗本命延生真經註解』のような人物の絵は認められないものの、北斗九星と二使者の靈符の図様が添えられる(図16)。

この二使者について、本図と記述内容を比べると、「擊羊使者」が劍を執る記述がない点、「陀羅尼使者」は枝付きの花ではなく、「華盤」を手に執る点が異なっている。さらに「陀羅尼使者」は「陀羅使者」と表記されるなどの相違が見られる。一方、第三章で確認した使者と北斗九星の乗っている雲の描き分けは『太上玄靈北斗本命延生真經註』の記述にある、北斗九星に先行して降臨してくる二使者の性格を反映している。北斗九星の雲に比べ、二使者が乗る雲の尾を細長く伸ばすことで、より速い速度で供養者のもとに降臨させていることがわかる。「北斗九星に先行して降臨し人間の善悪を判断する」との役割を明確にあらわす表現として注目される。女性の姿で北斗九星よりも先を進むことから、この記述の使者を描いたのは明らかである。

さらに二使者の説明については、明時代の『蠡海集』『鬼神類』にも認められる。和刻本も作られ広く知られた書物で、撰者の王達は『四庫全書』の解題より明時代の錢塘の人で博識とされる以外は不明である。その中の記述は二使者の持物の描写に関係しており、次のように記される。

北斗居亥、以亥為正、天門三合臨卯未、故以陀羅擊羊當之、卯為春木旺鄉、故陀羅托桃花、未為羊、故擊羊托羊首也、又斗位於北所理在於天南、故使者有擊羊陀羅之像、蓋陀羅托桃花者桃之為物、花實俱赤、文明離午之義也、擊羊托羊首者未肖也、斯以所寓意在焉、又陀羅花名故在手托之、猶擊羊之托羊首也(四庫全書本)

北斗「亥」に居る。「亥」を以て正と為す。天門三合、「卯」と「未」に臨む。故に「陀羅」「撃羊」を以てこれに当つ。「卯」は春木の旺郷と為す。故に「陀羅」、桃花を托す。「未」は羊と為す。故に「撃羊」、羊首を托すなり。また斗、北に位し、理とする所は天南に在り。故に使者として「撃羊」「陀羅」の像あり。けだし「陀羅」の桃花を托する者は桃の為物なり。花実ともに赤きは、文明離午の義なり。「撃羊」の羊首を托する者は「未」の肖なり。斯の意を寓するゆえんはここに在り。また「陀羅」は花の名、故に手に在りてこれを托すは、なお「撃羊」の羊首に托すがごときなり。

亥の方角に北斗、卯の方角に陀羅、未の方角に撃羊を当て、三合を為すとしている。三合とは陰陽五行説において干支のうち特定の三つを組み合わせることで気の生、旺、墓の移り変わりを表す、または一つの大きな気となるという思想である。巳酉丑は金気三合、申子辰は水気三合、寅午戌は火気三合、亥卯未は木気三合となる⁽⁴⁸⁾。木の気は一年のうち亥の十月で発生し、卯の二月で最も大きくなり、未の六月で終わるとされる。卯は木の旺に当たり、春には桃の花が盛んに咲くため卯に当たる陀羅は桃の花を持ち、未に当たる撃羊は羊頭を持つという。

『蠡海集』の記述と本図を位置関係に注目して比較すると、北斗の前を二使者が進む点では共通するが、本図では画面全体が木気三合の配置から左右を反転して描かれる。この理由は明らかではない。そこで本図を天に上げる場合を考えてみたい。本図の下辺が手前に来る向きで、表が見えるように天井に貼り付け、上端を北側とした場合、向

かって右に陀羅、左に撃羊、北斗が北西から南東方向に向かい、『蠡海集』の木気三合の並びと一致する。したがって天から北斗が降臨する様子を再現した可能性がある。

最後に二使者の持物である桃と羊頭についてみていく。陀羅尼使者、陀羅使者、陀羅と表記される使者は、本図では桃の花のついた枝、『太上玄靈北斗本命延生真経註』では華盤、『蠡海集』では桃花を持つとしていた。ここでは桃として考察したい。

「桃」は長寿の果実であり、辟邪の意味がある⁽⁴⁹⁾。桃は花、果実ともに赤く、赤は中国でめでたい色と考えられている。桃を用いた辟邪の例は複数みられ、例えば桃の枝の柄に葦を組み合わせた箒のような「桃笵」という道具がある。『春秋左氏伝』の襄王二十九年には「乃使巫以桃笵先祓殯」とあり、なきがらを桃笵で払うことで不浄を清めている。また昭王四年では雹の貯蔵について、貯蔵する際には黒い雄羊と黒きびを備えて司寒の神を祀り、取り出す際は桃の木で作られた弓といばらの矢で災いをはらうとある。鎌田正氏は「氷は至尊や喪祭などに用いるので、これを用いて邪気を払った。」とされる⁽⁵⁰⁾。「桃符」は桃の木で作られた符であり、門に掲げ魔除けとする。水上静夫氏は桃の木を用いた魔除けの道具が数多くみられることや、「桃」が「亡」や「逃」と通じ、鬼などの不祥な存在から逃れる意味があると考えられていたことを指摘する⁽⁵¹⁾。桃の木の呪力の由来として、『山海経』の度朔山の鬼門の話が挙げられる。加えて永尾龍造氏は辟邪のために桃の枝を用いる例から、鬼が恐れる桃の力は枝にこそ存在するとしている⁽⁵²⁾。桃の辟邪の力に注目すると、桃の木の部分を用いる例が多い。陀羅尼使者が桃の果実ではなく、桃の花のついた枝を持つことも辟邪の意味を重視したとみられる。

一方、撃羊使者が持つ「羊頭」にはどのような意味があるのか。七世紀の唐代初期に成立した類書『芸文類聚』に「説文曰羊祥也」(『説文』に曰う、羊は祥なりと。)と記述があり、これについて白川静氏は「羊神判によつて吉凶を判することからその意となったものである」とされる⁽⁵⁴⁾。また「羊」を含む「善」や「美」についても同様に、「羊神判」との関係指摘する。羊神判は、不直な者を識別する能力を持つ「解廌」という神羊を用いた神判である。『墨子』中に記述がみられ、解廌は羊と記される⁽⁵⁵⁾。

「齊の莊君の家臣の王里国と中里微が訴訟で争い、三年間決着がつかなかったため、莊君は羊神判を行うことにした。穴を掘り、羊の首を切り頸血を注いだ。王里国の誓辞が終わり、中里微が誓いを始めると、半ばまで至る前に羊頭が動いて中里微の脚に触れたので、中里微はつまずいた。その場へ神霊が至り、中里微を打ち殺した。」という内容で羊頭には不直なるものを見抜く意味があると分かる⁽⁵⁶⁾。

また「羊」と「陽」は音通であるため、この点においても込められる意味をみる必要がある。関連を示す例に「三陽開泰」がある⁽⁵⁷⁾。新春の祝辞に用いられる語であり、冬至に陰が極まり陽が生じてから、正月に陰陽が等しくなり、やがて陽が盛んになることに由来する。「泰」は易経において陽爻三本の上に陰爻三本が重なったもので、陰陽が交わり天下泰平に向かう状態を指す⁽⁵⁸⁾。「三陽開泰」は「陽」を「羊」に置き換え、三匹の羊の図によって表現される。以上のように音通であることから、羊には「陰」に対抗する「陽」のイメージが関連づいているとみられる。ここで邪を退ける桃の枝を持つ陀羅尼使者を「陽」とすると、「陰」の北斗と「陽」の二使者との解釈が考えられるが、二使者も女性のため検討が必要である。

以上より二使者は北斗が降臨する前に、その人間に穢れがないかを調べ、北斗に報告する役割を持つ。それぞれの持物は辟邪の桃に不直なものを識別する羊頭とみられ、二使者の役割に適すると考察した。

おわりに

北斗九星信仰は主に道教の発展する唐代頃から多く見られ、宋代に流行した。また北斗九皇として東南アジアでも信仰されている。

本図の信仰については「水陸会」と北斗信仰を手掛かりに考えた。「水陸会」は儀式の始まりを伝える説話中で、梁の武帝が「水陸会」を行うために做った阿難の儀式が、霊魂救済を目的としつつ、行った者が延命を得るものであったことから、「延命」に意義があるとみる。北斗信仰については、本図が道教の特徴を示しており、道教の北斗は司命の性格がクローズアップされ延命を願う対象であった。加えて本図が典拠としている『太上玄霊北斗本命延生真経』が延命をテーマにしていた。以上のことから本図が「水陸会」の堂内に飾られる意義として延命長寿を願う意味があった。

次に北斗七星が女性の姿で表されることについて、北斗と女性が共に陰に属するものであるため、一因として陰陽思想が関係しているのではないかとみる。

最後に陀羅尼使者と撃羊使者の二人は『太上玄霊北斗本命延生真経註』の記述から人間の行いを調べ、北斗に報告する役割があると思われた。

一方、二使者の持物が資料によって異なる部分について、その違いの理由やどれが正であるのか、また『蠡海集』の記述において北斗と

二使者が「木気三合」を構成する理由についてはなお検討が必要であり今後の課題としたい。

【註】

- (1) 井手誠之輔「北斗九星像軸」解説〔『世界美術大全集』東洋編第六卷南宋・小学館 二〇〇〇年〕、二七三頁。
- (2) 曾布川寛「漢鏡と戦国鏡の宇宙表現の図像とその系譜」〔『古文化研究』第十三号 黒川古文化研究所 二〇一四年〕、十六頁。
- (3) 林巳奈夫「石に刻まれた世界」(東方書店 一九九二年)、一六八頁。
- (4) 竹田晃訳「搜神記」(平凡社 一九六四年)。
- (5) 奈良行博「中国の吉祥文化と道教」(明石書店 二〇一一年)、八十三頁。
- (6) 白川静「字訓」(平凡社 二〇〇五年)、白川静「字統」(平凡社 二〇〇七年)。
- (7) 秋月観暎「道教史」(道教) 第一卷 平河出版社 一九八三年)。
- (8) 「太上玄霊北斗本命延生真経」〔『正統道蔵』第十九冊 藝文印書館 一九七七年)。
- (9) 金指正三「我が国に於ける星の信仰」(森北書店 一九四三年)、一四二～一四三頁。
- (10) 『宋大詔令集』卷第二百三十六(中華書局 一九六二年)。
- (11) 井手誠之輔「日本の美術 第四一八号 日本の宋元仏画」(至文堂 二〇〇一年)。
- (12) 宮崎法子「中国絵画と道教—宋元時代を中心として」〔『アジア遊学』第一三三号 勉誠出版 二〇一〇年〕、一〇九～一一一頁。
- (13) 増尾伸一郎「北斗信仰の展開と朝鮮本『太上玄霊北斗本命延生真経』」〔道教と中国撰述佛典』汲古書院 二〇一七年〕、五二八頁。
- (14) 原田正己「マレーシアの九皇信仰」〔『東方宗教』第五十三号 日本道教学会 一九七九年〕、五、十二頁。
- (15) 原田正己「九皇」解説〔『道教学典』平河出版社 一九九四年〕、九十六～九十七頁。
- (16) 「施食通覧 水陸大齋靈跡記」(『正統道蔵』第一二九冊 新文豊出版 一九七六年)、四四〇～四四一頁。阿川正貫「日本における水陸会—龍岸寺蔵「無遮水陸大齋記」より—」〔『仏教思想の受容と展開』第二巻 山喜房佛書林 二〇〇四年〕、一九〇頁。
- (17) 塚本賢暎編「國譯佛說救拔焰口餓鬼陀羅尼經」(『國訳密教』経軌部一 国書刊行会 一九八四年)、一四三～一四八頁。
- (18) 『大正新脩大蔵経』第二十一卷(大正新脩大蔵経刊行会 一九八九年)、四六四～四六六頁。
- (19) 牧田諦亮「水陸会小考」(『牧田諦亮著作集』第四巻 臨川書店 二〇一五年)、三六六～三六七頁。
- (20) 千葉照観「現中国で最も盛大な仏教儀礼—水陸会—」(『大正大学総合仏教

- 研究所年報』第十五号 大正大学総合佛教研究所 一九九三年)、四十六頁。
- (21) 「水陸儀軌」卷三〔『正統道蔵』第一〇一冊 新文豊出版 一九七六年〕、五六〇頁。
- (22) 註(20) 掲載論文参照、四〇～四十一頁。
- (23) 「施食通覧 水陸大齋靈跡記」註(16) 参照。
- (24) 高志緑「南宋時代の水陸画に関する復元的考察—個人蔵「諸尊降臨図」と知恩院蔵「羅漢集會図」を中心に—」〔『美術史』第六十三号 美術史学会 二〇一三年〕、四十七～四十八頁。
- (25) 本図は縦一一・五cm、横五四・一cm、水陸画とみられる他の作品の大きさは、奈良国立博物館蔵「十八羅漢図」縦一一八・二cm、横五四・九cm、アメリカ個人蔵「諸尊降臨図」縦一三一・〇cm、横五八・八cm、京都府知恩院蔵「羅漢集會図」縦一一八・五cm、横五九・〇cm、大阪府弘川寺蔵「地藏十王図」縦一一・二cm、横五二・六cmなどで多少の大小はあるが大方揃っている。
- (26) 谷口耕生「北斗九星像」作品解説〔『聖地寧波—日本仏教一三〇〇年の源流—』奈良国立博物館 二〇〇九年)。
- (27) 齋藤龍一「北斗九星図」作品解説〔『道教の美術 TAOSM ART』大阪市立美術館 二〇〇九年)。
- (28) 井手誠之輔「礼拝像における視覚表象—宋元仏画の場合—」〔『死生学研究』第十六号 東京大学大学院人文社会系研究科 二〇一一年〕、七十三～七十四頁。
- (29) 鷹巢純「途上としての空—水陸画と空中表現—」〔『国際比較神話学シンポジウム原稿集』比較神話学研究組織GRMC 二〇〇六年〕、二〇五～二〇六頁。
- (30) 註(8) 掲載文献参照。
- (31) 柳澤孝「道教の星曼荼羅」〔『国華』第九一一号 国華社 一九六八年〕、十四頁。
- (32) 「太上玄霊北斗本命延生真経註解」〔『正統道蔵』第二十八冊 藝文印書館 一九七七年〕、二二六～二二七頁。
- (33) 「仏説北斗七星延命経」〔『大正新脩大蔵経』第二十一巻 大正新脩大蔵経刊行会 一九八九年〕、四二五頁。
- (34) 張君房、蔣力生「雲笈七籤」(華夏出版社 一九九六年)、一三六～一三九頁。
- (35) 遊佐昇「道教と文学」(『道教』第二巻 道教の展開) 平河出版社 一九八三年)、三三四頁。
- (36) 山西省博物館「宝寧寺明代水陸画」(文物出版社 一九八八年)、二〇三頁。
- (37) 「白宝口抄」(『大正新脩大蔵経』第七巻 大正新脩大蔵経刊行会 一九七七年)、三〇四頁。

- (38) 柳澤孝「松尾寺所蔵の終南山曼荼羅について―唐本北斗曼荼羅の一異図―」
『美術研究』第二四八号 美術研究所 一九六六年。
- (39) 姜素妍「京都・高麗美術館蔵「熾盛光如来降臨図」考―道仏習合の観点から―」
『京都美学美術史学』第一号 京都美学美術史学研究会 二〇〇二年。
- (40) 註(38) 掲載論文参照、七頁。
- (41) 石田憲司「土地の神々」(『道教の神々と祭り』大修館書店 二〇〇四年)、
二十八～二十九頁。
- (42) 武田和昭「大阪・宝積院蔵の星曼荼羅図について―星曼荼羅図の一異形図―」
『仏教芸術』第一九〇号 毎日新聞社 一九九〇年、一〇五～一〇八頁。
ウェブサイト「国指定文化財等データベース」
(<https://kuisshitei.bunka.go.jp/heritage/detail/201/10531>) (最終閲覧日
二〇二二年十二月十一日)。
- (43) 濱田隆「九曜星図像」作品解説(『密教美術大観』第四卷 朝日新聞社
一九八四年)。
- (44) 三浦國雄『玉樞經』の形成と傳播(『東方宗教』第一〇五号 日本道教
学会 二〇〇五年)。「太上玄靈北斗本命延生真經註」には「玄陽子徐道齡
註」、「元統二年九月九日玄陽子徐道齡齋沐焚香再拜謹題」とあり、元統二年
(二三三四)に玄陽子徐道齡という人物によって書かれたとわかる。ただし、
この著者の詳細は不明である。
- (45) 「太上玄靈北斗本命延生真經註」(『正統道蔵』第二十八冊 藝文印書館
一九七七年)、二二五六～二二五六四頁。
- (46) 船山徹『京大人文研東方学叢書』第八号 仏教の聖者(臨川書店
二〇一九年)。
- (47) 曾我とも子「陰陽五行思想における三合の一考察―和名にみえる四季の循
環のなかの田の神をとおして―」(『現代民俗学研究』第五号 現代民俗学
会 二〇一三年)、吉野裕子「五行循環」(『吉野裕子全集』第九卷 人文書
院 二〇〇七年)、二四二～二四三頁。
- (48) 桃崎祐輔「桃呪術の比較民俗学(一)―日本の事例を中心として―」(『比
較民俗研究』第二号 比較民俗研究会 一九九〇年)、奈良行博『中国の吉
祥文化と道教』(明石書店 二〇一一年)、八十六頁。
- (49) 鎌田正『新釈漢文大系』第三十二卷 春秋左民伝 三(明治書院
一九七七年)、一一三三～一一三六、一二六四～一二六六頁。
- (50) 水上静夫「花は紅・柳は緑 植物と中国文化」(八坂書房 一九八三年)、
一〇八～一〇九頁。
- (51) 永尾龍造『支那民俗誌』上巻(満州考古学会 一九二三年)、七十二頁。

- (52) 「藝文類聚 卷九十四 獸部中 羊」(『藝文類聚』下冊 中文出版社
一九八〇年)、一六三〇頁。
- (53) 白川静「字通」(平凡社 一九九六年)。
- (54) 白川静「中国古代の文化」(講談社 一九七九年)、一一六～一一八頁。
- (55) 山田琢『新釈漢文大系』第五〇卷 墨子 上(明治書院 一九七五年)、
三四六～三四八頁。
- (56) 金全信『中華五福吉祥図典 福』(国書刊行会 二〇〇五年)。
- (57) 「周易 卷四 上経 泰」(『漢文大系』第十六卷 周易 富山房
一九八四年)。
- (58) 齊藤隆三『画題辞典』(博文館 一九二五年)、一四八頁。

【図版出典】

- 図1・2：林巴奈夫『石に刻まれた世界』(東方書店 一九九二年)。
- 図3～6・10～12・15：『道教の美術 TAOSISM ART』(大阪市立美術館
二〇〇九年)。
- 図7：「太上玄靈北斗本命延生真經註解」(『正統道蔵』第二十八冊 藝文印書館
一九七七年)。
- 図8：「佛説北斗七星延命經」(『大正新脩大蔵経』第二十一卷 大正新脩大蔵経
刊行会 一九八九年)、四二五頁。
- 図9：山西省博物館『宝靈寺明代水陸画』(文物出版社 一九八五年)。
- 図13・14：『密教美術大観』第四卷(朝日新聞社 一九八四年)。
- 図16：「太上玄靈北斗本命延生真經註」(『正統道蔵』第二十八冊 藝文印書館
一九七七年)。

【附記】

本稿を成すにあたり、東北大学の長岡龍作教授よりご指導を賜りました。また
本誌査読者、編集者の皆様にご指導を賜りました。末筆ながら心より感謝申し上
げます。

【査読総評】（五十音順）

・専論として論じられることのなかった宝厳寺所蔵「北斗九星像」を取り上げた本稿は、特に画面左下に描かれる二使者の典拠とその役割について論究した内容である。まず三章において、九星と二使者の足元にみる雲の表現がそれぞれに異なり、後者が前者の雲に重なることに着目した。この描き分けから二使者の雲はより速く動き、九星に先んじて進んでいるとみるのは二使者の属性や役割を知るうえで重要な指摘である。さらに五章では、典拠不明であった一使者「陀羅尼使者」と「撃羊使者」に関して『太上玄靈北斗本命延生真經註』という資料を見出し、九星に先んじて供養者の前に現れ、敬虔さや穢觸の有無を取り調べるとの役割を明らかにした。また、別の『蠡海集』という資料から、北方の北斗が南面した場合、斜め前方向に位置する「卯」と「未」がまさに「陀羅尼使者」と「撃羊使者」に相当し、それぞれが手に捧げる「桃枝」は辟邪、「羊頭」は不直な者の識別を象徴するものとし、二使者の属性と持物の意味に迫った点は高く評価できる。

本稿は南宋時代の中国絵画を扱う一方、本誌は「日本の近世美術を中心とした江戸時代の文化に関する」と「投稿規定」にあり、「日本近世美術」と冠する雑誌であるため、明らかに分野を異にしている。ただ、本図は長らく日本に伝来し、図像の継承という観点からすれば、近世絵画の研究にとっても意義深い作品であるのは論を俟たず、その背景となる思想や信仰にも、近世絵画を検討するうえで参照すべき点が多々存在すると認められる。以上の理由に基づいて総合的に検討した結果、本誌への掲載を認めることとした。

（東北大学大学院文学研究科准教授 杉本欣久）

・これまでも注目されてはきたものの専論として論じられる機会の少なかつた南宋道釈画の重要作品について、図像の面から掘り下げた意欲的な論考と読んだ。冒頭では、基盤となる北斗信仰について、第二章では水陸会について、それぞれの発生や展開を概述している。やや話題が拡散しがちな印象も受けるものの、知り得た情報を糸口に議論の基盤を築いていく姿勢に好感をもった。それ以降の作品に関する考察も、描写と関連文献の情報と丁寧に取り、行論へと結びつけている。その結果、主題の北斗星に期待された信仰内容のみならず、侍者の意味にも新たな見解を提示できた。尊像の多く描かれる宗教絵画では、

主従の「従」に当たるモチーフの意味にも注目する必要がある、それが作品全体の理解にもつながることを示す点でも意義のある研究と評価した。優品だけに画風特徴や様式面、宮廷や寧波の作画環境などにも踏み込んでほしかったが、本稿がそれらの解明にも結び付くことを期待したい。存在が知られながらもまだ詳細な研究の及んでいない宋元仏画は数多く、その促進へもつながることを願うものである。

（京都市立芸術大学 准教授 竹浪遠）

・本稿で対象とする宝厳寺本「北斗九星図」は、南宋期に制作された星宿図であり、仏教儀礼に用いられる水陸画と関連するものと見られてきたが、類する絵画作例が少なく、その実態については多く考察の余地を残している。本稿は先行研究を精査したうえで、宝厳寺本を「水陸画」とみる向きに賛同しながらも、先行研究が十分に及んでいない三点を挙げて言及するたいへん意欲的なものである。

まず、北斗七星をなぜ女性像にあらわすかという点については、経典の挿図や日本・朝鮮半島の作例にまでひろく目を向けて検討を加え、陰陽思想との関連に着目する点は興味深い。実際、中国では古来より、たとえば東王父・西王母のように方位や男女など陰陽五行説にそった表現はなされており、宝厳寺本の考察にも有効であると思われる。ただし、宝厳寺本の七星が女性像であることを前提にしているが、髭をあらわさない男性像の可能性は無いのか、印象だけではなく服制など絵画表現上の「女性」性について説明を加えると、より説得力が増すのではないだろうか。また、先行する二使者、すなわち「陀羅尼使者」と「撃羊使者」について、絵画表現を『太上玄靈北斗本命延生真經』や『蠡海集』の記述に照らして検証し、その役割を明らかにしたこととはとくに評価できる。宝厳寺本と木気三合との齟齬についての解釈はやや性急な感もあるが、この指摘自体は示唆に富んでおり、今後のさらなる考察につながるものと思われる。

宝厳寺本「北斗九星図」のもつ絵画としての高い水準は、南宋宮廷や地域社会の主導者など、有力な施主（注文主）の存在を示唆するものである。本稿の細やかな検証は、宝厳寺本の解釈にとどまらず、制作の背景となった社会的要請を解き明かす展望を持っており、今後の活発な議論を導くものと期待されるため、掲載にふさわしいと判断した。

（京都国立博物館 学芸部研究員 森橋なつみ）